

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 去年の落葉：文苑  |
| Author(s)  | 碩田，春浦   |
| Citation   | 龍南會雜誌， 78： 104 - 106  |
| Issue date | 1900-05-05  |
| Type       | Departmental Bulletin Paper   |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/2298/5548">http://hdl.handle.net/2298/5548</a> |
| Right      |   |

はた人生のそれなるか、  
見よ、死の神の降り來て  
一度なれが手をとれば、  
後に残るはそもや何、  
はまれ、めづみか、勳功か、  
そえり、わざはひ、罪惡か、  
はた一片の墳墓か。

黃泉の境にたつ人よ、  
高くそびゆる紀念碑の、  
あとになきをばとふなかれ、  
名は一代の史をかざる、  
はまれのなきをとふなかれ、

### 去年の落葉

大津街道

大道平々砥不如  
老杉夾路無他樹

熊城東去總青蕪  
畝處時見阿蘇

頼山陽

碩田春浦

「深山にさきて人老れず、  
散り行く花を思はへば、  
「そこひもしれぬわたつみに、  
かゝやく玉」を思はへば、  
何かは歎くことあらむ、  
夕さびえき鐘の音に  
罪と屍のけがれより、  
はなるゝ魂よ何なげく、  
なが行く方を仰ぎ見ば、  
そこに老ばまぬ花はさき、  
そこに不斷の光てり、  
そこにけがれはなきものを。」

枯れし櫓の葉はらくと

吹く木枯に落つる時

傾く月の影ふみて

大津街道朝たてば

寒さはげしき肥の國の

枯野は霜にとさゝれて

岨路額す霜ばしら

蹈む足ごとに碎けつゝ

五里の杉馬場はるくど

阿蘇の煙につらなりて

氷るが如き月影に

かげも淋えき木立かな

月にくだけてさらくと

谷間に咽ぶ白川や

さゝらく岸に枕ひきて

たどる街道はや三里

賤が伏屋の軒端より

一聲鳴くや鶏の

曉つぐる其聲に

み空の星はうすれゆく

月も沈みてひんがしの

嶺の松影いとしるく

たちわかれゆく横雲の

み空に昇る朝日影

ふりさけ見れば故里の

空をかくせる阿蘇の峰

昇る朝日の影うけて

聳たつさまの尊えや

あはれ尊きその峯の

尾の上より立つ煙はも  
いく世いくその歌人が  
胸の思ひを焦えけん

數鹿流の瀧

阿蘇連峰の谷間より  
たばえり出る白川や  
よべの時雨に水まして  
矢を射る如き水の勢

はえなく岩につまづきて  
谷間響かま山ゆすり

讚美の歌

故ありて、去年の十月の末つ方、ものゑたるもの

吉田藤輪

軒の芭蕉に秋更けて、  
水清かに天高き、  
野らには玉の露滋え、

削れる如き絶壁を  
争ひ落つる水の音

瀧壺の水打ち濁り  
濁りよりたつ白雲は  
あたりの岩木立ちこめて  
斜にかゝる虹の橋

み空に風はなけれど  
谷にそびゆる老松の  
木かげにひどり佇めば  
袂ふき卷く瀧の風

空には星の花艶に、  
讚美の歌は、あゝそこに。